九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ハインリヒ・フォン・モールンゲン : ミンネの一形態

西田, 越郎

https://doi.org/10.15017/2332890

出版情報：文學研究. 51, pp.13-19, 1955-03-20. 九州文学会
バージョン：
権利関係：

ハインリヒ・フォン・モールンゲン

――ミンネの一形態――

西田越郎

ホーエンシュタウフェン時代は、封建的騎士制度の確立した時代であるが、それと共に騎士文学の興隆期でもあつた。十二世紀末から十三世紀初頭にいたる約二十年間は、叙事詩および抒情詩の領域において華麗な花を咲かせた時期である。今こゝに抒情詩人の一人、ハインリヒ・フォン・モールンゲンについて述べる前に、宮廷抒情詩ことにミンネ・ザングの発展の迹を辿つてみるのは決して無駄ではあるまい。

ヴィルヘルム・ディルタイはドイツ中世の宮廷抒情詩について次のように述べている。

ホーエンシュタウフェン時代の詩人、フリードリヒ・フォンハウゼンとラインマル・フォン・ハーゲナウの抒情詩は、プロヴァンス文学の影響のもとに、変転つねなき生活要素から離脱した。すぐれた騎士の貴婦人に対する求愛が詩の主題となつた。この関係は、生の個人的本能と厳重に切り離して表現された。こうして求愛は、最も崇高な、かつほとんど唯一の詩材となつた。これらの詩人は、強烈な大胆不敵な生や南国的な官能の陶酔から、騎士的婦人崇拝にいたるまでの、さまざまな形態の恋愛を包蔵しているプロヴァンス抒情詩とは、なんとひどく異なつていることだろうか。そして彼らがこの関係に沈潜すればするほど、そこから思慕の享楽、恋愛のうちに生の内容を求める幻想が生まれた。青春の情緒が人間生活の全体となつた。そして彼らは刹那を表現する民衆的な、もしくは民謡に培われた詩をすべて拒けた。プロヴァンスの文学の方法によつて、彼らははじめて芸術的な宮廷抒情詩の特別な全性格を完成したのである。(Wilhelm Dilthey : Von der deutschen Dichtung und Musik, aus Studien zur Geschichte des deutschen Geists, 1933. 山西英一訳に拠る。)

ドイツ中世のミンネ・ザングの源流が、南フランスのプロヴァンスの吟遊詩人たるトゥルバドゥール Troubadour たちに求められることは周知の事実である。プロヴァンスの宮廷において行われた恋愛奉仕 Minnedienst もしくは婦人奉仕 Frauendienst の風習は、広くヨーロッパを風靡してドイツにも伝来した。騎士によつて選ばれ、崇拝と献身的な奉仕の対象となる身分高き既婚の婦人に対する恋愛感情、いわゆる Hohe Minne をうたつたも

のが、ミンネ・ザングと呼ばれる。しかしいま述べたものより更に広い恋愛感情をうたつた抒情詩には、極めて素朴な恋愛歌謡が見られる。これらは未だプロヴァンスの影響を受けていないものである。それは一一五〇年頃まで溯ることが出来る。オーストリアのキューレンベルクの詩人 Kürenberger と呼ばれる人の詩で、それには未婚の少女の男性に対する恋、あるいは別離の悲哀をうたつたものが多い。これらは純粋な意味でのミンネ・ザングではなくて、民謡に基づく素朴な恋愛詩というべきであろうか。きわめて単純な形式に、素朴な感情が盛られているのである。またオーストリアの詩人ディートマル・フォン・アイスト Dietmar von Aist には既にミンネ・ザングの傾向が僅かながら認められ、キューレンベルクの詩人と初期宮廷抒情詩を結ぶ過渡期の詩人といえるであろう。そしてドイツに於ける『後朝の歌』Tagelied が彼に始まることは特記さるべきであろう。さてライン下流ニーデルラントのマーストリヒトの近傍に生まれたハインリヒ・フォン・フェルデケ Heinrich von Veldeke は宮廷騎士文学の父と仰がれているが、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクはフェルデケを讃えて

Er impfete daz êrste rîs
in tiutscher zungen:
dâ von sît este ersprungen,
von den die bluomen kâmen,
dâ sî die spæche ûz nâmen
der meisterlîchen fünde; (Tristan, 4736—41)

といつているように、彼はフランス・ノルマンディの詩人の書いた『エネアス物語』を原拠として、叙事詩『エネイーデ』Eneide を完成し、初めて宮廷的な恋愛を取扱つたのである。フェルデケを師と仰いだウォルフラム・フォン・エシェンバハが、フェルデケをミンネの達識家としているように、フェルデケによつて新しい宮廷的騎士文学がうみ出されたことは明白である。彼は抒情詩をも残したが、叙事詩におけると同様、抒情詩は従来の素朴な民謡的な恋愛歌謡から、一段と発展を遂げることになつた。プロヴァンス詩人の影響は徐々に顕著となり、ライン・フランケンのフリードリヒ・フォン・ハウゼン Friedrich von Hausen に於て、初期宮廷抒情詩は長足の発展をみることになるのである。

一一七〇年より一一九〇年に至る二十年間は、ほゞハウゼンを中心とするライン地方の詩人の時代であつた。一一九〇年、皇帝フリードリヒ・バルバロサは、その前年におこした十字軍の征旅半ばにして歿した。これは政治的にも、また文学上にも一つの転機となつた重大な事件であり、一一九〇年こそは正に騎士文学の発展にとつて劃期的な年となつた。すなわち、十字軍に参加したハウゼンは、皇帝に先立つ僅か前に同じく歿し、フェルデケが沈默したのもこの時期であつた。（それが彼の死によるものか否かは判然としないけれども）。またルドルフ・フォン・フェニス Rudolf von Fenis も一一九六年その姿を消した。ハウゼンを廻つてミンネ・ザングに勢力をふるつたライン地方の詩人にかわつて新しい世代が登場するのである。この新世代の人々には、宮廷抒情詩の完成者としての重大な使命が課せられているのである。その新風とは、アルブレヒト・フォン・ヨハンスドルフ Albrecht von Johansdorf、ハルトマン・フォン・アウエ Hartmann von

Aue、ハインリヒ・フオン・モールンゲン Heinrich von Morungen、ラインマル・フォン・ハーゲナウ Reinmar von Hagenau、最後にヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ Walther von der Vogelweide の五人である。

プロヴァンスの流れをひくミンネ・ザングが、ミンネの本質からして、ややともすれば現実的な体験から遊離した観念的なものになるのは自然の勢いであつたが、ミンネ・ザングを芸術的に形式内容的に飛躍させたのはラインマルである。そして一種の社交詩 Gesellschaftslyrik となつて来ていたミンネ・ザングを、旧来の宮廷的な伝統から解放し、新鮮な血液を送り込んだのは、ヴィーンの宮廷でラインマルに師事したヴァルターである。

中世の殆ど大多数の詩人がそうであるように、ハインリヒ・フォン・モールンゲンについても、その外面的生活については殆ど判らない。ヴァルターのように、その政治詩によつて足跡を辿り、政治的信念を知り得るような詩人は稀である。モールンゲンの名を伝える記録もすこぶる乏しい。文芸の庇護者として著名なヘルマン・フォン・テューリンゲン Hermann von Thüringen の婿であるディートリヒ・フォン・マイセン Dietrich von Meißen（在位一一九五―一二二一）の文書にその名をとどめている。それによれば、詩人は高年の従士 miles emeritus として多年の功績により方伯から授けられた年金一〇ターレルを、ライプチヒのトーマス僧院に寄託した。またモールンゲンがライプチヒに住み、豊かに暮らしていた *Zu Leipzig gesessen und in groszen thon* ことがツィンメルの年代記に見える。また下つてコンラート・グリューネンベルクの紋鑑（一四八三）には、詩人がライプチヒに葬られたものとしている。彼の家系をたずねると、テューリンゲンのザンゲルハウゼン Sangerhausen に近いモールンゲンの出身とされ、同家の紋章は月に星を散らしたものであつたといわれている。彼が一二二二年に歿したことは明らかであるから、おそらく一一六〇年頃に生まれ、一一八〇年頃に詩人としての活動を開始したものと想像される。彼は初期ミンネ・ザングの詩人として、ラインマルと共に第一等の地位を占めているのだが、ラインマルがヴィーン宮廷において、ヴァルターという優れた後継者を得て、一派の宗匠となつたのに反して、モールンゲンは、流派を打建てたわけでもなく、ヴァルターに影響を与えている（Vgl. Kurt Halbach : Walther von der Vogelweide und die Dichter von Minnesangs Frühling, Stuttgart 1927）とはいえ、後の詩人にさして大きな力を及ぼしているのでもない。のみならず、「メーリンゲルの歌」Möringerlied の主人公として、タンホイザーやナイトハルトやブレンネンベルクなどと同じく伝説的人物にされてしまう始末である。（これは本稿の主題ではないので詳述は避ける。）しかしモールンゲンは、カール・フォン・クラウスの指摘するように、「まことにあらゆるミンネ・ザングの詩人のうちで最も豊かな人物」であり、その感覚的な表現には、意外なほど近代性が認められるのであつて、筆者がこの詩人に惹かれた理由も、一つはそこにあるのである。

現今モールンゲンの詩は、かなりよく残されていて、すべてハルトマン・フォン・アウエまでの初期ミンネ・ザングを集めた『ミンネ・ザングの春』Minnesangs Frühling（以下 MF と

略す）におさめられている。彼の作品は、三三篇を数える。（三六篇ともいわれるが、そのうち三篇は疑問とされている。）中世の抒情詩は教訓的意義を持つ教訓詩乃至は格言詩、あるいは敬虔な宗教的感情を吐露した宗教詩、または道徳の堕落を歎く詩 Klagelied を含むのを常とするが、モールンゲンにあつては不思議にかゝるものが全く含まれていない。ではモールンゲンの抒情詩の主題は一体何であるか。それはミンネであり、一切がミンネを中心に、ミンネの悩みをめぐつて廻転しているのである。これは彼の抒情詩の大きな特色というべきであろう。しかも同じようにミンネを扱いながら、単調に陥ることなく、常に情熱をたたえ、常に新鮮であることは、まことに驚嘆に値する。宗教的教養を充分に有すると共に、中世に於ける最も感覚的で、最も情熱的な抒情詩人であつたモールンゲンは、ミンネをいかにうたつているのであろうか。ミンネ・ザングの主題たるミンネが、詩人によつて趣きを異にすることは自明の理である。ラインマルにせよ、ハルトマンにせよ、その抒情詩には夫々の独自性が認められる。ヴァルターにあつては、天上の愛と地上の愛との融合による「真のミンネ」wahre Minne とでも呼ぶべき高次の境地に到達しており、彼が宮廷抒情詩の完成者と見られる所以であろう。モールンゲンに於けるミンネの本質を、いくつかの詩を例にとつて考察するのが、本稿の目的である。

モールンゲンの描くミンネは、多くの恋愛詩人と同じく、トゥルバドゥールの伝統に従つている。高貴の婦人 hêre frouwe と騎士の関係は必らず主従のそれであり、この婦人に服従することは、詩人にとつて君侯の地位にも比すべきものと考えられた。彼のごく初期に属するとされる詩に次の一節がある。

Ich bin keiser âne krone,
sunder lant. daz meine ich an den muot:
dern gestuont mir nie sô schône.
wol ir lîbe, diu mir sanfte tuot.
daz schaffet mir ein frowe fruot.
dur die sô wil ich stête sîn,
wan in gesach nie wîp sô rehte guot. (MF 142,19—143,3)

詩人は貴婦人に歌を捧げることによつて奉仕し、その誠実 triuwe は婦人の恩寵 hulde, genâde によつて報いられることになる。このように見て来ると、モールンゲンのミンネ・ザングは全くプロヴァンスのそれの域を脱していないかに見えるが、彼においては崇拝の対象たる貴婦人の内面的・霊的な面に重きが置かれていることに注目せねばならない。こゝには騎士対貴婦人の独得な関係の新しい体験が行われているように思われる。そしてこの体験は、彼の鋭い感覚によつて、豊かな形象と比喩を与えられて描出されるのである。

初期の詩（MF 122,1；123,10；127,34；134,6；134,27；143,4）に描かれたミンネは、以上述べたものと解することが出来る。例えば

Mîn êrste und ouch min leste
fröide was ein wîp,

der ich mînen lîp
bôt ze dienste iemer mê.
diu hôste und ouch diu beste
in dem herzen mîn,
sêt, daz muoz si sîn,
der ich selten frô gestê.
ir tuot leider wê
al mîn sprechen und mîn singen :
des muoz ich an fröiden mich nu twingen
unde trûren swar ich gê.

Wêr ir mit mîme sange
wol, sô sunge ich ir :
sus verbôt siz mir,
wan mîn swîgen töhte ir baz.
nu swîge ich ir ze lange :
künde ich danne mê,
ich süng aber als ê.
wie stêt mîner frouwen daz,
daz si sich vergaz,
und versagite mir ir hulde ?
owê des, wie rehte unsanfte ich dulde
beide ir spot und ouch ir haz.

Nu rât et, liebe frouwe,
waz ich singen müge
sô daz es dir tüge.
sanc ist âne fröide kranc.
mir wart niht wan ein schouwe
von dir, und der gruoz,
den ich teilen muoz
mit der werlte sunder danc.
diu zît ist ze lanc
âne fröide und âne wunne :
nu lâ sên wer mich gelêren kunne
daz ich singe niuwen sanc. (MF 123,10—124,31)

わが崇拝する婦人は詩人に歌うことを禁じた。それで詩人が沈默すると、彼女はそれを詩の泉が涸れたためだと解する。悦びなくばうたうことは出来ぬ。詩人は、彼女の気に入るためには何をうたえばよいのか、言つてほしいと訴ねる。 sanc ist âne fröide kranc (＝Sang ohne Freude ist leer)、歌に必要欠くべからざる愉悦を自分に与えて欲しいという、 fröide の希求がこの詩の主要なテーマということが出来る。

また MF 127,34—129,13 では、前の詩における心からの希求にも拘らず、婦人によつて何の喜悦も与えられなかつた詩人は、先程の宣言をひるがえして、再びうたい始めるのである。

Ez ist site der nahtegal,
swan sich ir liep volendet, sô geswîget sie.

durch daz volge ich nâ der swal,
diu durch liep noch leit ir singen niene lie.
sît daz ich nu singen sol,
sô mac ich von schulden sprechen wol :
'ôwê / daz ich ie sô vil gebat
und geflêhte an eine stat
dâ ich gnâden nienen sê'.

Swîge ich unde singe niet,
sô sprichet si ze mir : 'dîn singen douch mir baz.'
spriche ab ich und singe liet,
sô muoz ich dulden beide ir spot und ouch ir haz.
wie sol man der nu gelebe.
diu dem man mit schôner rede vergebe ?
ôwê / daz ir ie sô wol gelanc
und ich lie dur si mîn sanc !
ich wil singen aber als ê.

（小夜啼鳥は、愛の幸福が終ると、歌をやめる。私は、悦びにも悲しみにも、決して歌い止めぬ燕に従おう。....）

詩人は、このように悲しみを押さえて、つばくらのようにうたい出すのである。自分が彼女のために時々沈黙しなければならぬのは残念なことだ。そして詩人は以前と同じようにまたうたいたい ich wil singen aber als ê と述べて、更に自分の歌が彼女の心に届かぬことを後悔して、悲しくとも私はさらに奉仕を続けて、命の果つるまで彼女の讃美を告げよう、おそらくその時彼女は私をあらゆる悲しみから救つてくれるだろうという。かくて詩人モールンゲンはこの詩において、たとえ愉悦は与えられなくとも、「以前と同じようにまた歌う」ことが出来ることを示すのである。この詩は、巧みな押韻による音楽的効果によつて、モールンゲンの技巧を示す美しい詩の一つとされている。

しかし、密接に結びついたこの二つの詩に現われる婦人は、たゞ気まぐれな女性にすぎず、詩そのものも、詩人の反省に拘束されすぎた傾きがあり、初期の作品であるためか、まだモールンゲンの持つ独自性を充分示していないように思われるのである。

モールンゲンに於けるミンネの根本思想は、むしろもつと強烈なもので、ミンネの魔的な力を詩人は常に感得していたと思われる。ミンネは詩人から、時にはすべての感覚を、あるいは言葉すら奪つてしまう。ミンネは人を時には衰弱させ、また荒狂わせる力を持つている。ミンネの持つ魔力を、モールンゲンは様々な形で詩に表現している。例えば MF 145,1 において、詩人は自分の気持を、鏡に映つた己の姿に魅せられ、鏡に手をかけて遂にそれを壊してしまう子供の体験に比している。それは次の詩句をもつて始まる。

Mirst geschên als eime kindelîne,
daz sîn schônez bilde in eime glase ersach
unde greif dar nâch sîn selbes schîne
sô vil biz daz ez den spiegel gar zerbrach.

そして人間の悦びを増す愛は、さながら夢の如く、婦人を私へと導く。私は他のすべての婦人たちにもまさる彼女の輝くばかりの美しさを認めた。たゞ彼女の喜悦に溢れた赤い唇が、蒼ざめて苦悩に歪むのを見る時、非常な不安に私はとらわれた。

Grôz angest hân ich des gewunnen,
daz verblîchen süle ir mündelîn sô rôt.
des hân ich nu niuwer klage begunnen.
sît mîn herze sich ze solcher swêre bôt,
daz ich durch mîn ouge schouwe solche nôt,
sam ein kint daz wîsheit unversunnen
sînen, schaten ersach in einem brunnen
und den minnen muose unze an sînen tôt.

泉に映じた己の姿に魅せられて、命を絶つまで愛さねばならぬという、かのナルヂスのモティーフによつて、モールンゲンはミンネのデモーニシュな力を描くのである。このような例は他にも多くあり、例えば愛の女神ヴェーヌスや、パーリスの姿を借りて、詩人はミンネの強い魔力を様々にうたつている。

モールンゲンのこのミンネの思想から、愛の官能的な一面が引出されることは、容易に想像される。恋愛奉仕において、官能性は固く禁ぜられていたのであるから、モールンゲンはそれを深く包み隠さねばならなかつたが、その官能性は彼の Tagelied (MF 143,22) にうかがうことが出来るであろう。

モールンゲンは、元々博学な人であつたらしく、古典的素養のみならず、宗教的素養をも身につけていた。彼の詩には宗教文学の影響が相当顕著であることがいわれている。彼のミンネの思想と体験は一種神秘的な宗教性を帯びていることを忘れてはならぬ。彼の最後の詩である MF 147,4

Vil süeziu senftiu tôterinne,
war umbe welt ir tôten mir den lîp,
und i'uch so herzeclîchen minne,
zewâre, frouwe, gar für elliu wîp ?
wênet ir ..... ob ir mich tôtet,
daz ich iuch danne niemer mê beschouwe ?
nein, iuwer minne hât mich des ernôtet
daz iuwer sêle ist mîner sêle frouwe.
sol mir hie niht guot geschên
von iuwerm werden lîbe,
sô muoz mîn sêle iu des verjên
dazs iuwerr sêle dienet dort / als einem reinen wîbe.

この詩においては、愛は一切の有限性を解かれ、無限の偉大な力に高められるのである。

ミンネ・ザングはライマルを経てヴァルターに至る道程に於て、トゥルバドゥールの影響から完全に離脱することが出来たのであるが、モールンゲンはプロヴァンスの残滓をなおとどめつゝも、彼独自の感覚性によつてミンネ・ザングの展開に偉大な寄与をなし得たのであつた。